ごあいさつ

令和３年２月、金子伊昔紅（いせきこう）氏の住宅兼医院であった旧壺春堂（こしゅんどう）醫院主屋・土蔵が国の登録有形文化財に登録され、収蔵資料の整理が開始されました。町内には近代俳句に関する資料が数多くありますが、同医院で昭和前半から戦後にかけての資料が一括して見つかったことは、皆野の俳句の歴史をたどる上で大きな意義を持ちます。本企画展は、これらの資料をもとに皆野の俳句の歴史を紹介する第３回目の展示となります。

今回は、敗戦の年である昭和２０年に創刊され、昭和３１年まで刊行された俳誌『雁坂（かりさか）』を中心に、皆野の戦後俳句の歩みをたどります。同誌には秩父郡内外から多くの俳人が参加しましたが、主宰の伊昔紅が「派閥も結社も超えた作句道場」を表明していたこともあり、同人や会員は『馬酔木（あしび）』や『寒雷（かんらい）』、『風』、『鶴』など、さまざまな中央俳誌に所属していました。また、金子兜太をはじめとする中央俳人も客稿や作品を寄せ、『雁坂』は多様な作品と評論で賑わいを見せています。本展では『雁坂』１０年の歩みを３期に分け、中央俳壇の動向と合わせ、同誌の動きや俳人、その作品を紹介します。

末筆になりましたが、本企画展開催にあたり、貴重な資料をご出展いただいた壺春堂や所蔵者各位、ご協力いただいた「兜太・産土の会」の皆さま、そして前回に続き、記念講演会を快くお引き受けいただいた田中亜美様に心より感謝申し上げます。

皆野町教育委員会

昭和２０年８月、日本は敗戦を迎えます。戦前から戦中の厳しい検閲は終わり、「日本文学報国会」も解散、全国的に俳誌が一斉に復刊、創刊されます。『昭和俳句作品年表　戦後編』（東京堂出版）によれば、昭和２０年から昭和２５年に刊行された俳誌は２８５種で、戦前の昭和１０年代の総数に匹敵します。特に敗戦の翌年である２１年は１３０種にもなっています。

『雁坂』は、昭和２０年１１月に創刊された皆野の俳句雑誌です。主宰であった金子伊昔紅は、昭和７年から同９年まで俳誌『若鮎』を刊行していましたが、『雁坂』はその後身と位置づけられました。

敗戦という時代の節目に『雁坂』を刊行した理由について、創刊号の「発刊のことば」に以下の文があります。

（戦争俳句は）多数の優秀作品を生み且つ俳句の大衆性を呼びさました（中略）戦後の痛ましい世相の中に戦争によって拡げられた俳句の耕地こそはこの侭荒廃させてはならない。（中略）大衆性を持つ俳句の播種こそ絶対に必要である。（『雁坂』創刊号　「発刊のことば」）

戦争俳句が、歪んだ形とはいえ短歌とともに多くの出征兵士に拡がりをみせたと振り返りつつ、これを平和な時代に繋げたいという意志が伝わります。

一方で、伊昔紅の胸中には、東南アジアに出征して独自の作風を確立し、将来を期待されながら病死した持田紫水（『馬酔木』同人（推薦後逝去））や、硫黄島で戦死した田野紅子（『鶴』同人）の姿があったに違いありません。

◆　戦後俳句の背景①：近代俳句批判（桑原武夫「第二芸術」）

昭和２１年、文芸誌「世界」に掲載された桑原武夫の「第二芸術－現代俳句について」は、それまでの俳句のあり方に見直しを迫った評論です。

桑原は、俳句は世俗を離れた風雅（ふうが）の文学であり、近代化した社会では俳句は人生を表現しえないと説いた上で、俳句は文学として一流ではなく、二流（＝「第二芸術」）と批判しました。これを受け、俳壇全体で戦後社会にふさわしい俳句のあり方が模索されます。

中心となったのは、戦前に難解派・人間派と称された中村草田男（くさたお）や加藤楸邨（しゅうそん）でした。両氏は産業、経済、政治を作品に題材として積極的に取り込みます。その上で、占領政策や政治・社会の混乱、復興に向けた動きの中、俳句を詠む人と鑑賞する人が、それぞれの立場で感じ、考えていることを、社会認識として共有できる作品を模索しました。

社会という「公」の存在と、「私」としての苦悩や感情は、俳句という一つの文学作品の中で相容れるのか・・・草田男や楸邨の苦悩が、後の「社会性俳句」への道を拓くきっかけとなります。

高値の靴かにかく買へり祭笛　　草田男（昭和２２年）

何がここにこの孤児を置く秋の風　　楸邨（昭和２３年）

いくさよあるな麦生（むぎふ）に金貨天降るとも　　草田男（昭和２４年）

※　『昭和俳句年表　戦後編 昭和２１年～４５年』（東京堂出版）より抽出

1－1　雁坂の屋台骨

表1は、俳誌『雁坂』が創刊された昭和２０年から休刊の年である昭和３１年までに、同誌の雑徭集「雁坂集」に投句した人数を集計したものです。

昭和２２年から同２４年という創刊から早い時期に、会員の勧誘が積極的になされたと推察されます。事実、この時期の『雁坂』誌面には、秩父鉱山や昭和電工など、秩父を代表する工場や企業に『雁坂』会員が赴き、俳句会を催しています。その背景には、俳句が職場の文芸活動として浸透しつつあったことがあげられるでしょう。

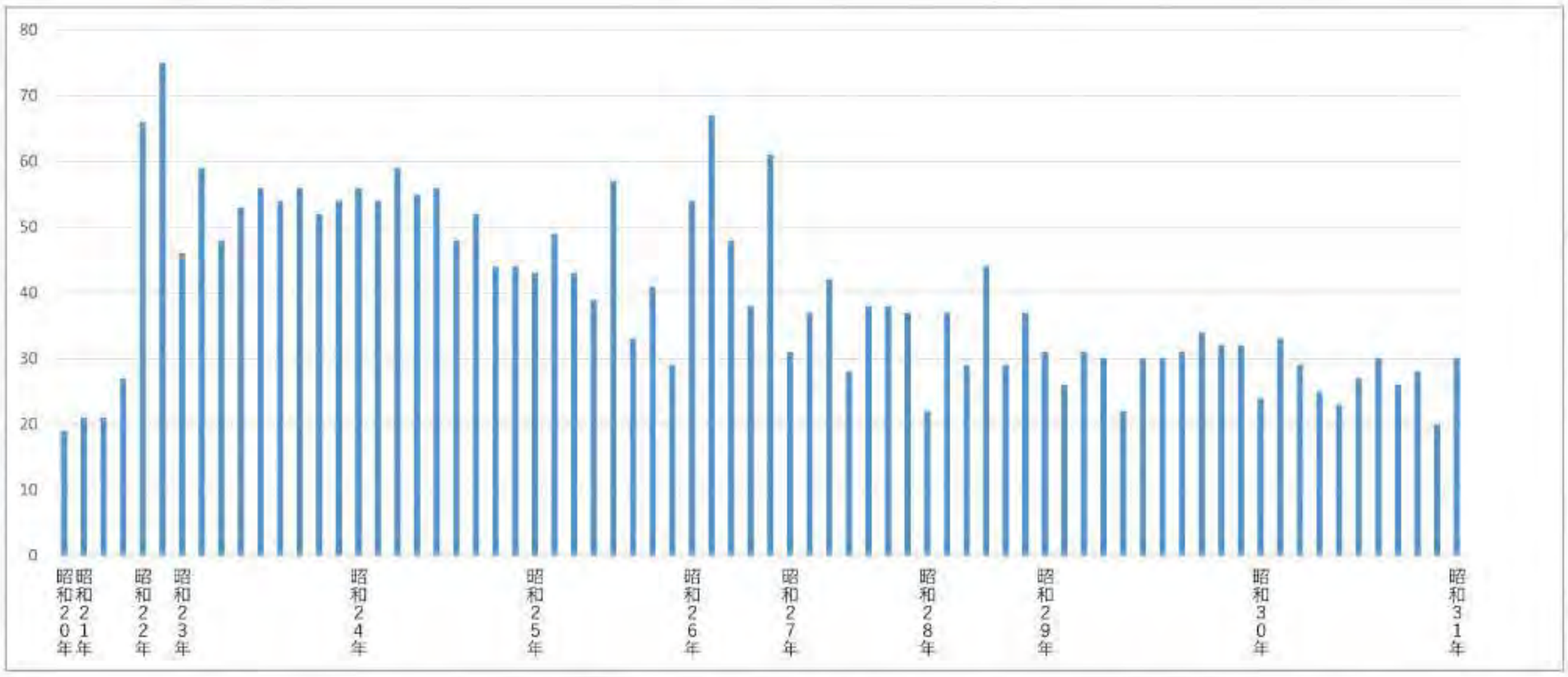

表1　俳誌『雁坂』「雁坂集」投句会員数の推移

※　俳誌『雁坂』昭和２０年11月号～昭和３１年9月号まで72冊から抽出（合併号を除く）

※　最多投句者数は昭和２２年10月号の７５名で、最少は昭和２８年2月号の２２名

1－2　同人制と支部創設

会員の順調な増加を受け、『雁坂』は昭和２２年９月までに同人制を採用し、同人作品欄も設けられました。昭和２２年末で同人は７名でしたが、その後、ほぼ毎年会員の中から推薦がなされ、昭和３０年１月には２６名となっています。

一方で、新規会員に秩父郡外の俳人が多くいたことを受け、各地に支部が設立されました。昭和２３年３月時点で６、翌２４年５月には８支部となり、秩父郡内にとどまらない「地方俳誌」としての『雁坂』の基礎が固まります。各支部では、主宰（しゅさい）の伊昔紅を招待した定例句会や、支部主催の吟行（ぎんこう）が催されています。

●　俳誌『雁坂』の支部

野上支部（現長瀞町）	：昭和２２年９月までに設立
秩父鉱山支部	：昭和２２年９月までに設立
外秩支部（現東秩父村）	：昭和２２年８月設立
秩父町支部（現秩父市）	：昭和２３年３月設立
丹荘支部（現神川町）	：昭和２３年４月設立
小川町支部	：昭和２４年５月設立
毛呂山支部	：昭和２４年５月設立

※　昭和２４年５月時点で支部数８の記載があるが、残り１支部は不明。

※　野上支部は、『若鮎』からの会員が多かったため早期に設立されたと考えられる。
　　秩父鉱山支部の設立が早い時期であった点にも注目したい。

1－3　方向性の確立

同人制の採用や支部創設など、俳誌としての基本的な枠組みが出来上がる様子を見ましたが、では『雁坂』はどのような俳誌を目指していたのでしょう？

雁坂の目的は派閥も結社も超えた作句道場である。（中略）やがてここを踏台として大きな飛躍をしてもらうことにある（『雁坂』昭和２３年3月号）

「作句道場」という言葉は、『雁坂』前身で、壺春堂の小さな句会から始まった俳誌『若鮎』（昭和7年～9年）の精神を受け継いでいると言えそうです。

２年後には「雁坂の本質」として以下の一文が掲載されました。

いろいろの系統の人を交えているということも「地方誌」の在り方としては良いのではないか。（中略）私（＝伊昔紅を指す）が『馬酔木』に帰属しているからといって敢て之に引き込もうとはしない。その意味で系派の純粋性は保ち得ないかもしれないが、「地方俳誌」としての行き方はそれでよいのではないか。

（『雁坂』昭和２５年3月号「雁坂の本質」）

「系統」とは、文中にある『馬酔木』などの俳句結社を指します。伊昔紅の考える「地方俳誌」とは、身分や出身、どの俳句結社に所属しているかなどを問わない、純粋に俳句の切磋琢磨を目的とした場でした。この姿勢は、紆余曲折を経ながらも、最後まで維持されていきます。

2－1　『雁坂』の取り組み

約10年間続いた『雁坂』では、大幅な紙面変更や、同人と会員の質を高めるための企画が試みられました。このような取り組みは、会員数が安定した昭和２５年以降に本格的にはじまります。主なものを紹介しましょう。

●　「合評」（昭和２５年）

支部単位で作品を講評（こうひょう）する取り組み。事前に提出された支部の作品を、相手支部の同人・会員が対話形式で批評します。「同じ句の鑑賞にも夫々（それぞれ）異なったものがあろうと思ふ。そうした意見の活発な展開が望ましい」（『雁坂』昭和２５年1月号）。小川町支部と外秩支部、外秩支部と野上支部の計2回が催されました。

●　「三者放談（ほうだん）」（昭和２５年～同２７年）

同人作品を批評する機会がないという指摘を受け企画された、同人作品の講評欄。「合評」と同じく対話形式で進められました。後に、対象に「雁坂集」が加わるとともに、会員による同人欄の講評や、女性俳人特集も組まれています。

●　「俳句になるまで」（昭和２５年）

自作品を対象に、作者が「感動を、対象をどんな風に把握し表現」（『雁坂』２５年7月号）して作品に仕上げたかを紹介する取り組み。主に俳句入門者のため企画されました。

●　「斑雪（まだらゆき）」（昭和２５年～休刊）

休刊まで続いた企画です。通信欄に近いもので、同人、会員に限らず投稿がなされました。自身の近況、中央俳人との交流や研究会への参加報告、自他の作品評のほか、交換日記のような形で会員間の交流も行われました。

このほか、注目会員や同人の作品、寄稿された中央俳人の作品が特集として適宜紹介されています。

2－2　『雁坂』の俳句論議

昭和２６年頃から、『雁坂』会員や同人による、俳句論や中央俳壇の動向の紹介、『雁坂』のありかたへの提言が活発になります。

当初、この動きは金子洸三や高荷三峯など、中央俳誌『寒雷』や『風』に参加していた俳人の手で始まりました。背景に、昭和２２年から同２５年頃まで盛んに寄稿された、金子兜太（『寒雷』・『風』）や原子公平（『風』）、余寧（よねい）金之助（『萬緑』（ばんりょく））、安東次男（『寒雷』・詩人）等による『雁坂』の作品評や評論の存在があったことは間違いありません。

昭和２７年以降には、奥野昭子や関根紫郷、柴田梨果等による投稿があります。昭子による中央女流俳人の紹介、洸三と梨果による「社会性俳句」の評価、紫郷による『雁坂』の総括と今後のありかたの提言。高宮住子は俳誌『風』に細見綾子の作品鑑賞を寄稿しています。

いずれも、『雁坂』同人や主要会員が、中央俳壇の動向や作品に注目し、研究と勉強を続けていたことが分かります。

●　『雁坂』同人・会員による主な評論

「ヒョウヒョウ談義」	高荷三峯	『雁坂』	昭和２６年４・５月号
「硝子戸の中をみる ー細見綾子鑑賞ー」	高宮住子	『風』	昭和２６年７月号
「女性俳句について ー目かくしされている現実ー」	奥野昭子	『雁坂』	昭和２７年１月号
「ざんげろく」	高荷三峯	『雁坂』	昭和２７年６月号
「三峯兄への手紙」	金子洸三	『雁坂』	昭和２７年７月号
「私と雁坂」	柴田梨果	『雁坂』	昭和２９年１０月号
「雁坂調」	関根紫郷	『雁坂』	昭和２９年１１月号
「私の希求するもの」	柴田梨果	『雁坂』	昭和３０年２月号
「たるんだ視野」	金子洸三	『雁坂』	昭和３０年２月号

3－1　『雁坂』の分岐点

昭和２４年と同２５年は、主宰の伊昔紅と同人の馬場移公子が『馬酔木』同人に推薦された年です。伊昔紅同人推薦の際には、『馬酔木』主宰である水原秋櫻子（しゅうおうし）を招待した句会が計画されましたが中止となっています。

秋櫻子の来秩に向けた動きはその後も続いていたようで、昭和２６年６月には栃本吟行が決まっていましたが、大雨に伴う交通機関の不通により、『馬酔木』同人である小田倉白流子のみが参加する結果となりました。

秋櫻子の秩父来訪は「皇鈴山吟行会」として同年９月に実現されますが、一連の動きの中、『雁坂』内に「秩父馬酔木会」が結成されています。

先生（＝秋櫻子を指す）を御招待申上げるには先づ秩父馬酔木会を結成しなくてはと云う（中略）考えで、秩父馬酔木会第一回研究会を（中略）七月二十八日伊昔紅先生の道場に開いた（『雁坂』昭和２６年１０月号「皇鈴山吟行会」）

「秩父馬酔木会」の発足は、派閥も結社も超えた作句道場を表明していた『雁坂』内に困惑と混乱を招いたようです。２ヶ月の休刊を経て９月に刊行された『雁坂』７月号後記に、以下の一文が掲載されています。

雁坂は復刊される。これを機に雁坂を馬酔木の出店にしようとする企てがなされたが、これは主宰者によって強く拒否された様である。雁坂は依然作句道場として復刊される筈（はず）である。（『雁坂』昭和２６年７月号）

作句道場としての『雁坂』のあり方は維持されましたが、この後、『馬酔木』の占める位置は確実に大きくなっていくのです。

◆　皇鈴山吟行会

昭和２６年9月２３日、持田紫水の句碑がある皇鈴山（みすずやま）山頂で、中央俳誌『馬酔木』主宰の水原秋櫻子一行を招待しての吟行会が催されました。

当日は、『馬酔木』一行が槻川（東秩父村）、『雁坂』一行が三沢から山頂へ向かい、昼過ぎに山頂で合流しています。山頂広場では秩父音頭が２回披露され、和やかな雰囲気の中、地元で採れた栗や茸、トウモロコシなどがふるまわれました。当日は各所から男女青年団の応援があり、アイスクリーム屋も山頂まで来ていたようです。

当初の予定では皇鈴山から釜伏峠を経て寄居まで下りた後、句会を催す予定でしたが、予定超過で句会は中止となりました。『雁坂』に掲載された作品は、後日秋櫻子や『馬酔木』同人が選句したものです。

皇鈴山山頂での『雁坂』一行。前列右から３番目が伊昔紅

3－2　「秩父馬酔木会」の吟行

俳誌の主な活動に句会と吟行があります。吟行は、名所や旧跡（きゅうせき）に赴いて作品をつくることを指します。現地で素材を取捨選択し、推敲を経た上で当日の句会に作品を提出しなくてはならないため、鍛錬（たんれん）に最適とされます。

吟行は、それまでの『雁坂』では、支部主催のものを除きほとんど見られませんでしたが、「秩父馬酔木会」の発足とともに定期的に催されるようになります。誌上にも当日の様子や作品が掲載されました。場所には、栃本や秩父鉱山など奥秩父周辺が選ばれています。

●　「秩父馬酔木会」による吟行

日程	場所	人数	
昭和28年6月20日～21日	栃本（大村旅館句会）	6名	
昭和29年6月12日～13日	秩父鉱山	6名	※秩父鉱山文化部より約20名が句会に参加
昭和30年5月28日～29日	栃本（大村旅館句会）	5名	
昭和31年	栃本（夕暮山荘句会）	7名	

吟行で詠まれた作品には、秩父鉱山や二瀬ダムなど、戦後の混乱期から安定期を経て、高度成長期へ向けて変貌する秩父の姿をとらえたものが含まれます。これが「社会性俳句」であるかどうかは別として、当時の奥秩父の生活や交通、産業の様子を細やかに記録した誌上報告とともに貴重な資料といえます。

3－3　「馬酔木鍛錬会」への参加

中央俳誌『馬酔木』の「馬酔木鍛錬会」は、年1回から2回程度催される吟行句会で、「秩父馬酔木会」の手本にもなったものです。『雁坂』誌では、「馬酔木鍛錬会」に福島杉花や大野槙月子、鶴川沙雨を派遣するとともに、参加報告を誌上に掲載しています。

●　『雁坂』誌に報告された「馬酔木鍛錬会」参加報告

昭和28年7月号	「谷川岳に遊ぶ」	福島杉花
昭和29年5月号	「安房の鴨川＝馬酔木鍛錬会参加の記＝」	福島杉花
昭和30年5月号	「残雪＝第三回馬酔木鍛錬会参加記＝奥日光～湯本」	福島杉花
昭和30年6月号	「梅雨の霧ヶ峰鍛錬会参加記」	鶴川沙雨

3－4　『雁坂』の活動

昭和27年以降の「雁坂集」投句者数は、おおむね30名程度で推移しています。昭和24年のピーク時と比較すると約二分の一ですが、一方で同人数は昭和24年の17名（推）から、昭和30年1月時点では26名（昭和30年2月号「雁坂同人名簿」）になっています。

『雁坂』昭和30年10月号に、「雁坂集」会員から『馬酔木』に投句する数が増え、20名を突破することがあるとの記載があります。同時期の『雁坂』は、『馬酔木』に投句する上位会員と、『馬酔木』や『寒雷』、『風』など、多様な中央俳誌に参加していた同人の手で活動がなされていたと考えられます。

◆　戦後俳句の背景②：社会性俳句

前項でも取り上げた草田男や楸邨の作品を受け、「社会を詠む」ということについて考える動きが活発になります。俳句の「社会性」に関する議論と呼ばれます。

一連の議論は、素材と内容の面から整理されます。昭和２９年に角川『俳句』誌で特集された「揺れる日本―戦後俳句二千句集―」は、政治・経済や戦争・平和、基地等、主に素材面から作品を分類、整理した試みで、『雁坂』や秩父郡内俳人の作品も掲載されています。では、社会現象を素材にした俳句はすべて「社会性俳句」といえるのでしょうか？

金子兜太と中島斌雄（俳誌『麦』主宰）は、作者の「態度」（兜太）あるいは「モラル・生き方の基準」（斌雄）を重視しています。これは、作品を貫くテーマやメッセージ性があらかじめ明確に意図され、定まっているか、と言い換えられるかもしれません。

なお兜太は、困難や苦渋に満ちた生活や心情、そこから自然に出てくる社会批判を誠実に表現する態度を、いずれは社会性へ連なる庶民性と呼び、俳句が趣味から創作に至る段階の態度としています。

◆　社会性（庶民性）俳句の鑑賞（相馬遷子と伊昔紅）

寒うらら税を納めて何残りし　　相馬遷子
重税の顎を炬燵（こたつ）に載せもたれ　　伊昔紅　　（『雁坂』昭和２５年４月号）

遷子は長野県佐久出身で『馬酔木』同人。伊昔紅と同じ医師で往診句を得意としました。共通点の多い2人による、税を素材とした作品ですが、遷子の切迫感に比べて伊昔紅の作品はどこかとぼけたような感じが漂っていないでしょうか？

危機感や絶望にあふれ、社会に抗う句だけが社会性・庶民性俳句ではありません。追い詰められても顔は笑って心で泣いて、一見とぼけた風に受け流すのは、長い人生を経た者のみが成し得る処世術です。兜太からすれば、伊昔紅の句は庶民性あふれる作品かもしれませんが、どこかユニークで詠むと安心する作品です。

※　遷子の句は『相馬遷子の百句』（仲寒蟬　ふらんす堂）より抽出

3－5　『雁坂』休刊

昭和３１年の1月・2月号から約半年を経た昭和３１年9月号に「雁坂休刊のことば」が掲載されます。休刊は同年半ばには決まっていたようで、伊昔紅の医師業や日々の雑用による『雁坂』の遅刊、また秩父音頭の活動が理由として挙げられています。なお秩父音頭に関しては、金子社中（かねこしゃちゅう）の県外遠征（新潟（「昭和２９年８月号」）、名古屋松坂屋（「昭和３０年９月号」））や家元碑建碑（「昭和３０年４月号」）など多くの記事が『雁坂』に掲載されています。

「雁坂休刊のことば」で、伊昔紅は『雁坂』の歩みを振り返るとともに、その意義について触れています。

雁坂会員の俳句水準は、地方俳誌としては相当高いところにありました。当初側面から指導していただいた人達は、現在では新しい俳句の先頭に立つ錚々（そうそう）たる顔ぶれであります。之等の人達の参加を得て陣営を強化し、中央俳壇に押し出すこともそう難事ではなかったと思っております。

然（しか）し私は最初からそう云う考えは持ちませんでした。飽くまで地方誌として初心者の鍛錬の場を提供することで満足して居りました

（『雁坂』昭和３１年9月号「雁坂休刊のことば」）

俳句への姿勢も態度も異なるさまざまな結社から集まった俳人の手で成り立っていた俳誌『雁坂』が１０年間存続し得たのは、上記にみられる伊昔紅の寛容な心持ちと、作句道場という当初の精神を捨てなかったためといえそうです。結果、『雁坂』は昭和２０年代の俳句史を凝縮したユニークな存在になりえたのだといえます。

◆『雁坂』人と作品の鑑賞

○昭和二十年～二十二年

旧『若鮎』会員からスタートした『雁坂』だが、昭和二十二年には「雁坂集」投句者が七十名を超え、同人制も設けられた。戦地からの復員や、戦闘に追われることのない日々を詠んだ句に実感が滲む。

還り来てわが焚く門火魂迎（かどびたまむかえ）

塩夜峡

『雁坂』昭和二十一年十一・十二月号所収。塩谷孝は中国大陸で敗戦を迎えたが、直前に愛児の死を知らされている。外地で没し、門火に迎えられた戦友に対し、自分は生きながらえて内地でわが児の魂を迎えている。復員や帰還を詠んだ句の中でも異色の作品。

往診のもどり銀河にみちびかれ

金子伊昔紅

句集『秩父ばやし』所収。病院が整備され、通院や入院が一般的になるまで、往診は耕地の人たちの健康を守る主な手段であった。伊昔紅の句の多くは往診の際に生まれている。急患か、夜遅くに患者宅を訪れた伊昔紅。事なきを得て自転車で帰る際に見た風景。

○昭和二十三年・二十四年

派閥も結社も超えた作句道場としての方針が表明される。秩父郡内外に支部が設けられ、「雁坂集」投句者も五十名程度で推移。兜太をはじめ、『風』、『寒雷』、『萬緑』等に所属する中央俳人の客稿盛ん。馬場移公子、若林正男、根岸愛允（二十三年度）、村田桑花、高宮住子（二十四年度）が同人に推薦される。伊昔紅は『馬酔木』同人に。

絢爛（けんらん）のバラ活け朝を大胆に

根岸　愛允

金子兜太「鑑賞」（『雁坂』昭和二十三年八月号）所収。初稿は「聖歌儚しバラ活け朝を大胆に」。「空の初夏ショパンが弾む少女の四肢」（『雁坂』昭和二十三年六月号）もある。

歌ふ児の咽喉（のど）を透せり春茜（はるあかね）

高宮　住子

『雁坂』昭和二十四年四月号所収。住子は丹荘支部所属で、移公子と並ぶ雁坂女流の双峯と評された。春茜は穏やかで柔らかな春の夕暮の意。

◆『雁坂』人と作品の鑑賞

○昭和二十五年・二十六年

島田纓公、高荷三峯、金子洸三等が社会を題材とした作品を次々と発表。支部間の「合評」や「三者放談」、「俳句になるまで」、「斑雪」などの取り組みが始まる。二十六年には水原秋櫻子一行を招いての皇鈴山吟行会が催され、「秩父馬酔木会」が発足。

槙挽(まきひ)く焦燥瞼(しょうそうまぶた)をかすめ降り出す雪

市川哭風子

『雁坂』昭和二十六年一月号所収。哭風子は『雁坂』同人で、昭和三十年頃から兜太も同人であった『風』誌に投句。同誌には山口顕夫(同人)もいた。槙は木の一種だが、良材となる立派な木の意もある。

菜の花や乞食の群れは歌持たず

島田　纓公

『雁坂』昭和二十五年五・六月号所収。纓公は『雁坂』同人で、休刊まで社会性の強い作品を発表し続けた。乞食の他、基地、水爆などを題材とした作品がある。掲句の「歌」は、単なる唱歌ではなく、自分の思いや意志を表明する心の源泉、矜持の意も込められているだろう。

蚕糞(こくそ)落つ医師に汲み置く手水(ちょうず)にも

金子伊昔紅

『馬酔木』昭和二十六年八月号所収。伊昔紅の往診句には、秩父の主要産業であったお蚕を題材としたものも多い。手水に落ちる蚕糞とは、蚕の糞や桑の食い残しを片づける除沙の作業が追いつかないほど忙しい様子。「蚕のねむり待ちて集まる茶碗の手」も同号。

○昭和二十七年

長島舟遊子、大野槙月子、福島杉花等、以後の『雁坂』運営や『馬酔木』との連絡を担う俳人が誌上を賑わす。養蚕や機織などの生業や秩父の人隣りを詠んだ数々の作品は地方俳誌の面目躍如。石塚友二と伊昔紅が対談した「雁坂八周年記念句会」が懐士館で開催される。「雁坂集」投句者数は三十から四十名。

寒稽古日々太りゆくこぶしの芽

大野槙月子

『雁坂』昭和二十七年二月号所収。「懐士館」は壺春堂裏手にあった道場。俳句会の他、漢文や古典の勉強会である「両忘会」、柔剣道教室が催された。日々の鍛錬で得る充実感を、春に向けて大きくなるこぶしの芽にあてる。

病む人の床を移して蚕屋（かいや）貼る

長島舟遊子

『雁坂』昭和二十七年四・五月号所収。蚕屋は蚕を飼う部屋で春の季語。読みは「こや」が一般的だが、ここでは表記としてみた。毛蚕から熟蚕まで約二十五倍の大きさになる蚕は、加齢とともに多くのスペースが必要となり、最盛期には座敷もお蚕の部屋にあてた。

機窓（はたまど）に霧寄する日を灯し織る

山口渓泉子

『雁坂』昭和二十七年十月号所収。渓泉子は機織工場に勤めた俳人で三沢の出。寄せる霧と機織りは、いずれも三沢谷の象徴といえる風景。

◆『雁坂』人と作品の鑑賞

○昭和二十八年・二十九年

「秩父馬酔木会」による吟行始まる。『馬酔木』の「馬酔木鍛錬会」には杉花や槙月子が参加。関根都美、吉良蘇月が同人に推薦され、桑花、舟遊子等とともに、戦後馬酔木の影響が濃い作品を発表。一方で社会性俳句の投句も盛ん。会員や同人は『馬酔木』、『鶴』、『寒雷』、『風』などに投句して好成績。投句者数は三十から四十名程度。

餅食はぬ醫師に握らす寒卵

金子伊昔紅

『雁坂』昭和二十九年一月号所収。診察後、客向けの囲炉裏ではなく、炬燵で患者や家族と団らんした際に詠まれた句。餅を断った医師に差し出された卵のほのかな温もりは、人の心の暖かさ。

したしさの鄙言葉（ひなことば）もて炉辺はづむ

関根　都美

『雁坂』昭和二十七年十二・一月号所収。鄙はひなびたの「ひな」。ここでは秩父弁の意。幼少から囲まれ、自然に身についた言葉を、家族団らんの場である炉辺で、気がねなく交わすことのできる喜び。

冬至湯や小さき掌が押す男の乳

関口　三平

『雁坂』昭和二十八年二月号所収。一緒に風呂に入った子が、まだ小さな手で自分の乳を押している。冬至湯の、柚子の香りさえ作品から漂ってくるような、家族のほほえましい一風景。

○昭和三十年・三十一年

「雁坂集」投句者数は二十名台で、三十年度の同人推薦はなし。「雁坂集」上位会員を中心に『馬酔木』への投句盛ん。「秩父馬酔木会」による吟行や「馬酔木鍛錬会」参加も継続。二十六名の同人（昭和三十年一月時点）は休刊まで多様な作品を発表し続けた。

長閑（のどか）さや神楽の庭は山の窪

福島　杉花

『雁坂』昭和三十年四月号所収。杉花は三沢出身で、『馬酔木』と『野火』（主宰・篠田悌二朗）に投句。箕山と外秩父山地を分かつ三沢谷の地勢、生業を詠むのを得意とした。下五句「山の窪」が、尾根上や谷の耕地に営まれてきた芸能を象徴する。

夏蝶や戦後を稚（わか）き杉檜

馬場移公子

『雁坂』昭和三十一年九月号所収。移公子は昭和二十五年度「馬酔木賞」を受賞し『馬酔木』同人に推薦された。「雁坂休刊のことば」で、伊昔紅から『雁坂』を託されたのも移公子。戦後に本格的に始まった植林を詠み切る。

やがて湖底春蚕秋蚕と飼ひつげど

金子伊昔紅

『雁坂』昭和三十一年九月号所収。昭和二十七年に着工され、同三十六年に完成した二瀬ダムを詠んだ句。同工事では二つの耕地が湖底に没した。奥秩父では原蚕飼育の痕跡を今も見ることができる。